

CSW66ユースレポーター報告書

トロント大学社会科学部

社会学・女性とジェンダー学専攻

伯野 寧

CSW66のユースレポーターに参加したきっかけ

2022年CSWのテーマ、気候変動とジェンダーの問題を問われたとき、深刻な問題だと理解しながらも、どこか自分には関係のないところで起こるものだと感じていました。また、勉強をするとしても気候変動とジェンダーは別々に学び、ふたつのインターセクションを無視していたようにも思います。そういったことから、CSW66 ユースレポーターという機会を通して、私はさらに自分の知識を深めることが必要だと考えたのです。それだけではなく、CSW66を通して、特に学びたいと思っていたのが構造問題へのアプローチの仕方でした。今までの経験から声をあげることは多くの人を巻き込み、共通認識を広げる力があると実感していました。しかし、それに加えて差別やその他の問題が起こる根源になる可能性や再生産をさせる社会の構造も変える必要があると考えています。気候変動においても、それをさらに加速させる要因を改善し、またそれによって影響を受ける女性たちへの被害をなくしていくためには、今ある構造をどう変えるかが必要です。そのために、CSWなどで行われるような会合での方策の制定や合意結論によって、政府に影響を与えていけるような力を間近に見てみたいと思いました。気候変動とジェンダーの問題のインターセクションを多角的な視点から学び、もし自分だったらどのような方法で構造問題を解決できるかを考える機会にするため、今回、ユースレポーターとして応募させていただきました。

CSW66 合意結論について

CSW66の合意結論は、CSWが初めて気候変動とジェンダー平等のつながりを認識した歴史的なものとなりました。ゼロドラフトから合意結論に至るまで、60時間もの話し合いが行われたようです。毎年行われるこのプロセスは当たり前のように感じられるかもしれませんが、私にとっては初めて会合の様子を見て、合意結論を読む機会になりました。構造問題をどう変えていくか考える貴重な経験となりました。

■徹底的に言語化することで問題を可視化

合意結論文書で強く印象に残った点は、一つひとつの問題や交差差別(intersectional discrimination)を認識し、気候変動が彼女たちにどんな影響を与えるのか明確にし、さらに全ての女性の役割を尊重すると記載することから始まっている点です。この部分は3-11ページに渡り、合意結論文書中の多くの部分を割き、明記されていました。

例えば、先住民族の女性については、彼女たちが受けている交差差別や暴力、ヘルスケアや教育へのアクセスが少ないことなど、彼女たちが経験するさまざまな不利益をまずは認識しています。また、その経験があると、気候変動の影響を受けた際、幸福に生きる権利すら奪われてしまうという点も明記されていました。同時に先住民族の女性は、伝統的な方法で生物多様性を守る重要な役割を担っていることも書かれています。

特権が与えられていない層が直面している問題を明確にし書き出すことは、問題を可視化し、特権があり問題を解決できる力を持つ層が行動するきっかけを作るための重要なプロセスであると感じました。また、明記することにより、共通認識を改めることもできます。それだけではなく、彼女たちが担う重要な役割も示すことで、特権のある層が、彼女たちを「ただの“被害者”で助けが必要な存在」と誤って認識をするのを防いでいると感じました。これは、特権のある層が自分たちのみに合った解決策を押し付けるだけの現状を変えることができます。そしてこの点をはっきり示すことで、それぞれの層が持つ知識を共有し共に問題に向け尽力するための土台を作るはずです。さらに、現状で可視化されている問題をはっきりさせることで、この合意結論を踏まえて見えていない問題を明らかにする可能性もあると思います。

他にも、受け取り方によって定義が変わるような曖昧な言葉を使用しないことにも感銘を受けました。各国の大使もそれぞれの経験などを話し、互いの合意がない言葉を含まないようにしていたようです。このことも、一つひとつの問題を理解していくため、とても重要だと感じました。

■前提条件をすり合わせた上で構造問題へのアプローチ

今回、会合を見て、合意結論文書を読んだことから、現状で見えている問題を認識し、明確な言語化を経て、何がどう問題であるのかという前提条件をすり合わせることで、構造問題へのアプローチ方法だと学びました。この過程を経ることで、具体的な実行方策を国際機関・加盟国の政府や市民社会に提言できると感じました。また、構造問題を変えるための根底には、やはり声を上げていくことも必要です。それぞれの声が届き問題が共有されることで、CSWのような会合で議題に上がります。その見えてきた問題の認識をそれぞれ声を通して共有することで、解決するにはどうすべきか行動も変わっていくのではないかと思います。

各国・団体のサイドイベント・パラレルイベントに参加して

サイドイベント・パラレルイベントを通して、たくさんの気づきがあったとともにまだまだ学びが足りないところも多くあると実感しました。

■ Feminist Responses to Invisibility and Violence

5人の社会学者が女性が直面するさまざまな可視化されていない問題や彼女たちが受ける暴力についての研究発表をしました。

Andrea S. Boyles 氏の“A Black Feminist Take on Race, Resistance, and Erasure in the Fight for Climate Change and Environmental Justice”は交差性の視点からブラックアクティビストたちが直面する差別についてのプレゼンテーションでした。環境アクティビストであるウガンダ出身のヴァネッサ・ナカテ氏も差別の被害者の1人です。AP通信がWorld Economic Forum Youth Climate Science Conference について報じた際、彼女が切り取られ、白人のアクティビストのみが写っているように見える写真が使用されました。これに対し彼女は声を上げましたが、AP通信からの謝罪はありませんでした。このように黒人女性であるというだけで、交差差別を受けている女性たちの問題を可視化する必要があると彼女は訴えました。

■ Debunking the False Solutions: towards Feminist Climate Justice

それぞれのスピーカーがジオエンジニアリング・ネットゼロなどの気候変動への解決策の問題提起をしました。彼女たちはこの解決策は経済的な利益を最優先させて、新自由主義的なシステムを維持するためだけであり、脆弱な層をさらに苦しめると訴えました。

例えば、たくさんの木を植えて大気中の二酸化炭素を吸収させようという試みは、強制的に住んでいる人々の土地を奪い、その土地由来の植物が育たなくさせます。また解決策の研究を行う段階でも、先住民族の土地を無断で使用することで、資源不足や竜巻などの自然災害の被害をもたらすこともあります。結果として、権力や特権がある層は、気候変動の加速に加担しながら影響を受けず、そうでない先住民族などの生活が大きく変わっているのが現状です。

気候変動を止めるためには製造や消費の方法を変えていくべきであるのに、現在の資本主義社会では利益が最優先になってしまい、根本の構造問題を変えていくアプローチは限られています。議論の中から彼女たちが提案した新たな解決策への道の1つ目は、力関係に気づくことです。誰が搾取され、誰がそこから利益を受けているのか、それを知る必要があります。2つ目は新自由主義的な経済の理想に向かっていくのが正しいのか問い続けることです。特権が与えられてないが故に自由競争についていけなくなり貧困に陥ってしまっても、自己責任が問われ救いの手がないような社会で本当に良いのか考え、他の道を模索することが必要だと彼女たちは訴えました。

日本のサイドイベント - Our Ethical Consciousness and Actions Change the World: Towards the Participation of All People in Environmental Issues -

今回のイベントで初めて翻訳作業に携わらせていただきました。そのため、わからないことや不安なことも多かったです。しかし鈴木千鶴子先生をはじめユースレポーターの方からもアドバイスを頂き、自然な日本語へ翻訳をするために学ぶことができたと感じています。

このサイドイベントからも改めて学び、考えさせられた点が多くありました。徳島県上勝町のように自治体レベルで気候変動やゼロ・ウェイストに取り組む地域があることも今回初めて知りました。

疑問に思う点もいくつかありました。例えば、現状の気候変動に対する取り組みの中の支援のあり方に対してです。今回、女性を経済的にエンパワーメントし自立を支援する方法として、エシカルな製品の製造に携わる機会を増やすプロジェクトの話を聞きました。現在の資本主義社会を彼女たちが生き抜く術を身につけるためにとても重要な支援方法だと感じます。加えてエシカルな方法で行われているため、彼女たちの労働力が不当に搾取されていることを防いでいる点も大切で、そこから大勢の女性が救われています。

反面、この支援のみでは対処療法的で、次に生まれてくる女性たちを新自由主義的な経済の構造に組み込み、歯車のような労働力を再生産していくのではないかと危惧しています。またリーニンフェミニズム(‘Lean In’ Feminism) (男性的な競争原理のなかで最大の生産性を発揮することを求める)の ような考えが労働の理想となる可能性もあります。

もし、複合的な要因でその経済的な自立のための取り組みから外れて、自由競争についていけなくなってしまうと、彼女たちに責任はありません。しかし現状の社会構造や階級社会の中では、そこから這い上がることも難しく自己責任を問われてしまう可能性もあります。男性的な競争原理のなかで最大の生産性を発揮することを求められることで新たな階級格差に女性たちは苦しめられてしまうのではないのでしょうか。

不平等な社会の被害者である女性たちが積極的に変わらなくてはいけないことも悲しく思います。こういったことから、パラレルイベントで語られたように新自由主義も進む道は正しいのか、またどうこの階級制度や構造問題を改善していけるのかということを実際の支援とともに考える必要があるのではないかと思います。

しかし、支援と構造変革のどちらも両立することの難しさが私には想像ができていません。もしかしたら、私の考え方は理想的すぎるのかもしれませんが。直接支援などの活動をなさっている方々のお話を聞いて学びを増やしたいです。

この経験を活かして

合意結論文書を読み、サイドイベントやパラレルイベントに参加し、何が問題なのかをはっきり認識することが次の行動へ繋がっていくことがわかりました。また、現在の特権社会から、私とは違う経験をし搾取され苦しむ女性たちが存在することを実感しました。

私には教育を受ける事ができ、明日をどう生き延びるかなどと考えなくて良いという特権があります。そういったことから、私は声を上げている人の声に耳を傾けて、その声をさらに大きくし、そして苦しんでいる人たちにこれ以上頑張らせないようにする責任があります。けれども、私が持つ特権も複雑で決して大きくはありません。女性であることから男性のような特権はないし、日本にいるときは‘純’日本人としての特権があるものの、一步、海外に出ると東アジアからきた日本人に特権はないと感じます。現状の特権社会で直面する問題もまだまだあります。

それでも、私より苦しんでいる人を想像すると、「私には特権がある...」という思いから、自身の問題を贅沢だと矮小化してしまいがちです。そのような時、女性とジェンダー学の授業にゲスト講師としてきたカナダの先住民族(Couchiching First Nation)であり弁護士である Tara Houska 氏が言った「本来、どんな悩みや問題も当事者にとっては辛いはずなのに、そこに大小がついてしまう悲しい時代になってしまった」という言葉を思い出します。あらためて、私の経験からくる問題を言語化し伝えることは、今の日本社会の構造問題を変えていくために必要であると信じ、特権を認識しつつも、自分の問題をしっかり伝えられるようになっていきたいです。

そのためには日常的にさまざまな人と対話していく機会を日本で増やしたいです。私が過ごした高校や大学では、バックグラウンドが違うことが前提であったため、自然とお互いの経験に耳を傾ける機会がありました。しかし、日本ではそういった意思疎通をすることがなかなかありません。相手の経験を一緒に言語化して、どのようにしたら今ある日本の構造問題を変えることができるのか、意見を共有したいです。幸いにもこのCSWユースレポーターの経験を通し、知識や経験があるアクティビストの方、研究者の方の存在を多く知りました。私の知らないことを質問して、話し合いに繋げていき、学びを深めていきたいと思っています。